

みんなで見守る外国人児童 in Hachioji ～地域一体の学習連絡帳の普及を目指して～

Create education safety net for foreign students with communication note

西浦ゼミ 子ども班
齊藤輝之 安藤優希 新垣愛理紗 田口敏広
長瀧真子 林義敬 藤木梨花 水上千里 三浦彩華
指導教員 西浦昭雄
創価大学 経済学部 経済学科 西浦昭雄研究室

キーワード：外国人児童・日本語学習・セーフティネット・連絡帳・地域一体

<企画概要>

I. テーマ設定

八王子市には 2016 年度現在 11,113 人の外国人が住んでおり、年々その数は増えている。これに伴い、外国人児童が増加し、昨年度は 490 人の外国人児童（5 歳～14 歳）の在住が確認されている。

八王子市は「ビジョンはちおうじの教育」の中で、外国人児童のニーズに合った教育を、「現代的・社会的な課題」として捉えており、市として積極的な対応に努めている。八王子市の教育ビジョンには、目指すべき教育の姿として、「地域の力を活かした学校づくり」「地域の力を高める学校づくり」「家庭の教育力を支援するしくみづくり」を掲げている。このことから、学校・地域・家庭が互いに支え合った教育環境を目指していることがわかる。私たちは、外国人児童を取り巻く教育課題に関心を持ち、八王子市内の複数の日本語支援団体でボランティアを行った。その中で、外国人児童の教育環境においても、学校・支援団体・家庭が三者一体となって子どもを見守る体制が重要だと考えた。したがって、「地域で見守る外国人児童の教育環境づくり」を目指し、私たちは活動を開始した。

II. 現状分析

A. 行政の日本語支援関連の取り組み

八王子市は、日本語習得が十分でない外国人児童生徒・帰国児童生徒のために、日本語学級・日本語指導に関して 3 つの取り組みを行っている。

①日本語学級の開設

同市では第六小学校と打越中学校の 2 校に、東京都認可を受けた時間通級制の学級を開設している。学級内では、日本語習得に向け週に 2～4 時間、児童に合わせた個別指導を行っている。

②外国籍等児童・生徒就学時支援者の派遣

同市内の小中学校に在籍し、来日して間もない児童生徒を対象に、初期指導として一定の期間、外国語で会話可能な支援者を在籍校に派遣している。

③日本語巡回指導

同市内の小中学校に在籍し、日本語の習得が十分でない生徒児童に対し、巡回指導員が訪問し、基礎的

な日本語指導を行っている。

さらに、市の外郭団体である八王子国際協会は、外国人児童生徒及び帰国児童生徒に対して、①不就学ゼロ、②教育環境の充実、③居場所づくりを目指して放課後学習支援を行っている。

B. ヒアリング調査から見えてきた課題： 子どもたちの状況把握不足

そこで、外国人児童への教育支援の実態把握のためのヒアリング調査を実施した。調査の中で、学校の教員側からは「通常の授業では彼らへの特別な対応は出来ない」「通級の時間だけで日本語学習が十分とは思えない」など、現行の行政支援だけでなく、支援団体の存在が重要であることがわかった。一方、支援団体からは「学校や通級で行っている学習と支援団体で行う学習にギャップが存在する」「学校・家庭での子どもの様子が分からない」などの声があり、また、家庭からは「言語の壁や仕事の忙しさのために、学校での子どもの状況についてよく知らない」などの声があった。つまり、子どもたちの状況の把握にそれが困難を感じていると言える。

C. 状況把握の重要性

子どもたちの状況把握の重要性は、次の 2 点から言える。1 点目に、効果的な学習支援のためである。多くの支援団体では、子どもたちが教材を持ち込み、それに対応して教える形をとっている。カリキュラムを組み、体系的に教えることが出来ず、持参した教材に依存している。故に、支援者は子どもたちの得意・苦手科目を把握できず、場当たり的な指導に留まってしまう。支援者にとって、学校での学習状況について知ることは、支援団体での指導内容を考える上で重要な役割を果たす。2 点目に、セーフティネットとして機能するためである。時に子どもたちは生活状況に問題を抱えていることも少なくない。学校・家庭・地域で彼らを見守り、個別具体的に対応する必要がある。加えて、外国人児童は、問題を抱えていても、発信・表現することが難しいために周囲も気付くことが困難である。故に、彼らを包括的に見守る体制の構築が必要である。

のことから、学校・家庭・支援団体の三者が協働して、子どもたちの状況を把握する必要があることが考えられる。

III. 私たちのプラン

私たちは、子どもたちの状況を効果的に把握するための学習連絡帳（以下連絡帳）を作成する。その連絡帳を学校・支援団体・家庭の三者間で共有することを提案する。

このプランを達成するための手順は以下の通りである。

①私たちが作成する連絡帳を子どもたちに配布②子どもたちが日本語学習をする支援団体や、学校に連絡帳を持参③支援団体、学校は定期的(週1回を想定)に連絡帳に子どもたちの学習の様子や進捗具合をやさしい日本語*で記入④家庭でも連絡帳を閲覧・記入する⑤各アクターが子どもの状況を把握している状態を形成する

つまり、連絡帳を学校・支援団体・家庭で共有することによって、外国人児童の状況把握を可能にする。これにより、日本語支援団体の「学校で何を勉強しているかわからず、子どもに必要な支援を見極めることが難しい」、家庭の「子どもの学習状況や学校・支援団体の大事な情報がわからない」という問題を解決することができる。また、やさしい日本語を統一して使用することで、学校・支援団体が困っていた保護者とのコミュニケーションの改善が見込まれる。

連絡帳内容(実物例)

連絡帳			
支援団体記入欄			
題材	①) 漢字	②) 記入欄	③) 記入欄
題材	①) ワクダック		
学習内容	②) 元素記号の復習		
【学習理解度】生徒記入			
① しゃべる・動かすできた できた まあまあできた あんまりできなかった できなかつた			
② 読む・書く・わかる できた まあまあできた あんまりできなかった できなかつた			
③ とくにできた とくにできた (自由に書いてね)			
【支援者からのコメント】(引継ぎ・意見・質問など)			
④) 元素記号は□まで一緒に復習しました。 △までに□まで覚えてくように宿題を出しました。			

概略図



IV. 進捗状況

連絡帳の導入・活動協力において、八王子市内の支援団体「八王子国際協会」「にほんごの会」「世界の子どもと手をつなぐ学生の会（CCS）」に企画を持ちかけ、すべての団体から導入に向けた前向きな意見を頂いた。特に CCS では、今後役員会議にて、導入を検討することが決定している。その上で私たちが作成した連絡帳の原案をもとに、支援団体のスタッフ・外国人児童それぞれの視点からの意見や改善点をもらいながら、修正を行っている最中である。また、八王子市内の二校の小学校（八王子市立第一小学校、八王子市立由井第一小学校）にて導入に向けての相談を持ち掛けた。さら、八王子市教育委員会に本提案に関する助言をいただいた。

V. 今後の課題

各アクターへのヒアリング調査の結果、支援団体、子どもたちからの賛同は得られるものの、2点の課題があると考えた。1点目は、学校への導入である。学校教員の多忙さを考えると、できるだけ書きやすく、記入の負担が少ないものを提供する必要がある。2点目は、施策の継続性である。以前 CCS が、団体内での共有を目的としたノートを作成した際、子どもがノートを持参しないことで継続できなかつた、という話を伺った。この事例から子どもたちが毎回連絡帳を持参する工夫が必要だと考える。

VI. 行政への提案

このプランの実現に当たって、行政への提案は3点ある。1点目に、私たち学生が連絡帳の内容・デザインを支援団体や教育委員会と打ち合わせる機会を頂くことである。内容については、学生・支援団体・教員で子どもの状況を記入する使いやすい内容を考えたい。また、子どもたちが毎日使いたくなるようなデザインを考えていきたい。2点目に、作成した連絡帳を製本し、外国人児童の在籍する小・中学校に配布することである。連絡帳の導入を学校から行うことで、外国人児童全員にアプローチができる。3点目に、外国人児童の保護者へ学校にて日本語支援情報を広報することである。やさしい日本語の理解が難しい保護者もいるため、八王子国際協会等が開催している日本語教室等の情報を学校で提供していただきたい。子どものことをきっかけに、保護者が日本語を学ぶモチベーションの一つになればと考える。子どもたちがこの連絡帳を使用することで、学校・家庭・地域で子どもを見守るネットワークが形成されていくだろう。

注釈)

*やさしい日本語：簡易な表現を用いる、文の構造を簡単にする、漢字にふりがなを振るなどして、日本語に不慣れな外国人にもわかりやすくした日本語である。